

障害支援技術を用いた特別支援教育に関する専門的知識・技能の習得を目指した授業の試み

特別支援教育講座・荻田知則

1. 授業の概要・目標

肢体不自由児者をはじめ、多くの障害児者は、学習・移動等の困難だけでなく、コミュニケーション上の問題を持っている。コミュニケーションがうまくとれないということは、当事者のQOLが低下したり、自己効力感が低下したりする可能性がある。ゆえに、特別支援教育の現場においては、障害当事者の「話したい」というコミュニケーション欲を充足させることが重要である。本授業では、代替コミュニケーション(AAC)や支援機器(AT)を用いることで、肢体不自由児が他者とコミュニケーションをとることができる支援法を学ぶ。

本授業の目的は、(1)障害疑似体験を通して、肢体不自由をはじめとした障害児者の困難を共感的に理解する態度を身につける、(2)障害児者のコミュニケーションを支援するAACやATの基本的知識について説明できる、(3)障害特性・ニーズに合わせたAAC、ATの使用方を説明できる、(4)当事者の生活にあわせたインタフェースを考案することができる、であった。

2. 講義の進め方と内容

本授業は、以下の通り行った。なお、各回の復習として、翌回に小テスト(5問)を行い、学生の授業外学習を促した。

- 1回：ガイダンス、AAC・ATとは？
- 2回：AAC・ATの種類
- 3回：発声発語器官の解剖・生理
- 4回：発声発語器官の発達(定型発達児と肢体不自由児)
- 5回：0～2歳の言語理解の発達(定型発達児と肢体不自由児)
- 6回：3～5歳の言語理解の発達(定型発達児と肢体不自由児)
- 7回：肢体不自由児者の疑似体験(コミュニケーション)
- 8回：肢体不自由児者対応のAAC、AT
- 9回：合併しうる障害(知的障害)と実践例
- 10回：合併しうる障害(発達障害)と実践例
- 11回：合併しうる障害(視覚・聴覚障害)と実践例
- 12回：グループワーク(VOCA)
- 13-14回：AAC・ATのフィッティング過程
- 15回：総括

以下に、本授業で取り扱った内容を概説する。

(1) AACに関する基礎知識

AACの定義やATの種類について概説するとともに、AACアプローチを適用する上で、理解しておくべき発声発語器官の解剖・生理や、言語発達について概説した。

(2) 障害疑似体験

肢体不自由児者が抱える困難を共感的に理解するために、疑似体験を行った。本授業で取り入れた疑似体験は、1)身体の一カ所しか随意的に動かすことができない肢体不自由児者が、五十音表や透明文字盤を用いて会話する、2)知的障害を併せ持つ障害児者が会話する、という2つであった。

(3) グループワーク

本授業では、障害児者用に開発された音声出力型会話補助装置(Voice Output Communication Aid: VOCA)や、として障害支援機器としての活用が進むスマートホン(iPhone等)等を紹介するとともに、それらの障害支援技術を教育現場で活用するため、教材としての使用方法・個人に併せたカスタマイズの方法等について実習を行った。

また、意識は清明であるが重度の運動障害により意思の伝達が困難な障害児者(閉じ込め症候群等)への支援として、現場では透明文字盤が用いられている。本授業では、透明文字盤をグループで作成し、疑似体験の中で試用する実習も行った。

(4) 事例も含めた実践例の紹介

疑似体験だけでは、障害当事者が感じる困難を過大に評価してしまう可能性もある。したがって、実際のコミュニケーション支援や機器の調整(フィッティング)過程の事例を紹介し、受講生の理解を深めるよう努めた。

3. 授業評価の方法と結果

アンケートは、受講生の成績に一切影響せず、授業に対する自由な回答を保証するために、成績評価終了後に、修学支援システムを通じて受講生に授業評価アンケートへの協力を依頼し、インターネットを通じて無記名式で行った。アンケートでは、以下の項目について質問した。登録者31名中11名から回答を得た。なお、a)については自由回答、b～i)については4段階尺度(1=ほとんどそう思わない、2=あまりそう思わない、3=かなりそう思う、4=非常にそう思う)、j)については6段階尺度(1=全然達していない、2=あまり達していない、3=どちらかという達していない、4=どちらかという達している、5=かなり達している、6=十分に達している)で回答するよう求めた。以下、授業評価で行った項目と得られた結果を示す(項目b～j)への回答の詳細は下図参照)。

- a) 一番記憶に残っている講義内容は何ですか？
文字盤等に関するグループワーク：6名、VOCA等の支援技術を使った演習：5名
- k) あなたの講義内容に関する理解度は、100点満点でいうと、どのくらいですか？

90-99点 2名 (18.2%)
80-89点 5名 (45.5%)
70-79点 3名 (27.3%)
60-69点 1名 (9.1%)

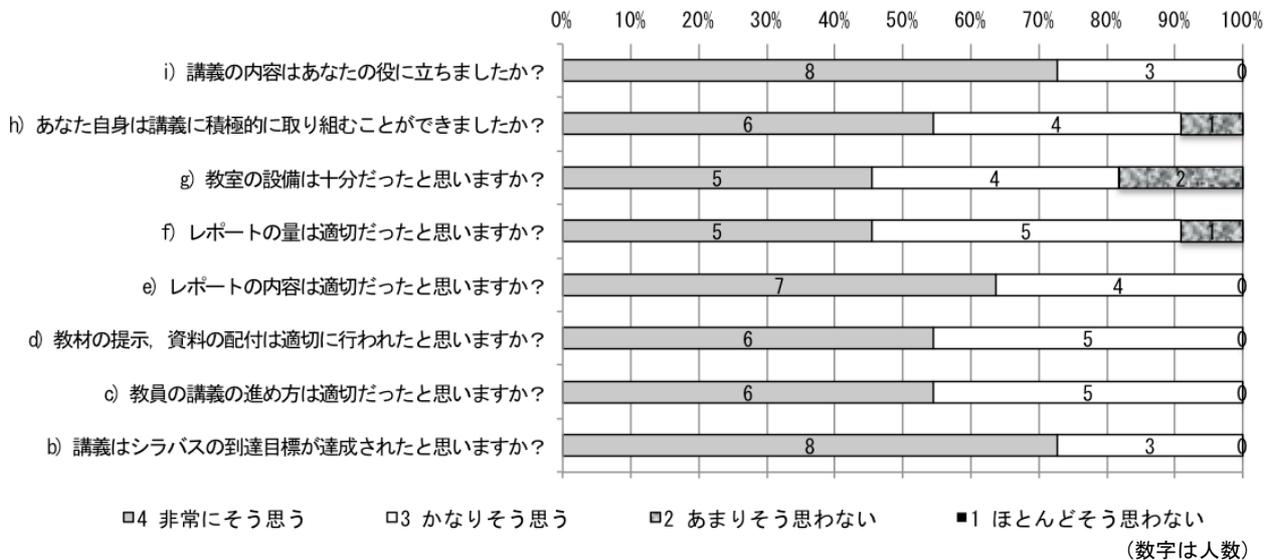
4. 考察・まとめ

a) の回答を見ると、実技型学習が記憶に残ったと回答している。また、b～i) への回答をみると、ほとんどの項目で「3 かなりそう思う」以上の高い評価を得た。本授業では、障害児者の生活に関する共感的理解を促進するために実技型学習を多く取り入れた。加えて、実習を行う前に、教育現場等で障害支援技術がどのように活用されているか、多くの視聴覚教材(VTR等)を用いた。これらの視聴覚教材は、受講生が障害児者の実態を理解する上で効果的だったと考える。使用した教科書類も、医学・心理学・福祉工学的基礎知識がわかりやすく解説されているが、今後更に受講生が主

体的・能動的に教科書類を使って理解を深めることができるような授業づくりにつなげたい。

k) への回答では、6割以上の受講生が80点以上の理解度と自己評価しており、理解度に関する自己評定は高いといえる。また、j-1～j-4)の項目への回答を見ると、j-1～j-3)については9割以上が「4 どちらかというと達している」と評価しており、受講生自身、授業の目標を達成したことを実感していると言って良いだろう。自由回答欄にも、「教科書で予習(小テストの勉強)したことが、後々授業で扱っていたのでよかった」との記述が複数あり、課題学習としての予習が効果的だったと考える。

ただし、授業評価アンケートと成績評価を分けるために、成績が確定した後、時間をおいてインターネット経由でアンケートを実施したため、回答数が減少した可能性が高い。今後、アンケートの実施時期・方法については検討する必要があるだろう。



| | 6 十分に達している | 5 かなり達している | 4 どちらかという と達している | 3 どちらかという と達していない | 2 あまり達してい ない | 1 全然達してい ない |
|---|------------|------------|---------------------|----------------------|-----------------|----------------|
| j-1) 障がい疑似体験を通して、肢体不自由をはじめとした障がい児者の困難を共感的に理解する態度を身につける。 | 2 | 4 | 5 | 0 | 0 | 0 |
| j-2) 障がい児者のコミュニケーションを支援するAACやATの基本的知識について説明できる。 | 1 | 7 | 2 | 0 | 1 | 0 |
| j-3) 障がい特性・ニーズに合わせたAAC、ATの使用方法を説明できる。 | 2 | 6 | 2 | 0 | 1 | 0 |
| j-4) 当事者の生活にあわせたインターフェースを考案することができる。 | 2 | 3 | 5 | 0 | 1 | 0 |

(数字は人数)